



環日本海文化圏の島をめぐる複数の関係性について ：『今昔物語集』巻二十六第九を読む

芹澤，久恵

(Citation)

海港都市研究, 17:3-18

(Issue Date)

2022-03-18

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013122>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013122>



環日本海文化圏の島をめぐる複数の関係性について

——『今昔物語集』巻二十六第九を読む——

芹澤 久恵

(SERIZAWA, Hisae)

I. はじめに

院政期に成立した『今昔物語集』（以下『今昔』と記す）は、現在のインド・中国・日本の三国の説話を収集編纂した仏教説話集である。巻二十六第九は、神によって島に招かれた七人の釣人が蜈蚣との戦いに助力した後、島に定住する話である。島の起源譚としての要素をもち、妹兄島の起源譚である第十話の前に置かれている¹。あらすじは以下の通りである。

加賀の国の七人の釣人が風に吹かれて島に漂着する。島から一人の男が現れ、島に招いた理由を伝える。男は、「沖のほうにある島の主がこの島を支配しようとたびたび島にやってくる。これまでは撃退してきたが、明日が決戦なので助けてほしい」という。翌日男の言う通り十丈程の蜈蚣が海からやってくる。男は大蛇の姿で現れ、大蜈蚣と死闘を繰り広げる。釣人は大蛇に助力をし、大蜈蚣を切り殺した。男は島の神で、釣人に礼を述べ島に住むことを提案する。釣人は国に置いている妻子の存在を伝えると、「加賀の国の熊田宮は「我が別れ」なので島に來たい時にはその宮を祭るとよい」と教えられた。釣人は、加賀の国へ帰り再び熊田宮を祭って島に向かった。その後彼らの子孫が増えて今の島となる。その島は猫の島という。島民は、年に一度加賀の国に来て熊田宮で祭をするが、祭をする姿を見た者はなくその跡だけを見つけないという。また能登国の舵取りが島に漂着した際、島民は食料を与えても島に近づけさせなかったという。舵取りは、島を離れる際、京のように小路があり人の往来が多い様子をみたという。また、近頃唐人はこの島に寄って食料を調達したのち敦賀に向かうという。唐人は島の存在を外部に漏らさぬよう口止めされるという。

¹ 『今昔』は、何らかの連想関係にある説話が二話、あるいは三話で一類をなして並ぶように配置されている。そのような配置の在り方を「二話一類様式」と呼んでいる。

『今昔』の巻二十六は宿報を副題に持つ巻であり、話末評²では「此ヲ思フニ、前生ノ機縁有テコソハ、其七人ノ者共、其島ニ行来、其孫于今其島有ラン。極テ楽シキ島ニテゾ有ナルトナン語り伝ヘタルトヤ。」としている。『新日本古典文学大系 今昔物語集五』や『新潮日本古典集成 今昔物語集 本朝世俗部二』（以下、『集成』と記す）は、この説話の蛇と蜈蚣が争うモチーフに注目する³。村山修一氏によると『新日本古典文学大系』の注釈は、「『太平記』の倭藤太の蜈蚣退治伝説と同類のものとしているが、蜈蚣にとらわれすぎた見方で、この話は決して英雄伝説のタイプに入るものではない。むしろ一種のユートピア的色彩が強い。（中略）この話は云わば、熊田宮の縁起譚であった。」と述べている。[村山1999: 33]

いずれも島に定住するまでの島の起源譚に関心が注がれ、島のその後を語る後日譚を含んだ説話全体の考察は行われていない。そこで本稿では、当該説話を島の起源譚と後日譚の二つに分けそれぞれの考察を行うこととする。起源譚と後日譚の語りの視点とその変化に注目し、説話全体に及ぶ問題（例えば島をめぐる多様な関係性や起源譚と後日譚の生成過程の相違など）の一端に迫りたい。また当該説話では、全体を通して日本海を往来する人々が描かれる。島をめぐる北陸内外の多様な関係や人々の移動への関心から、起源譚では熊田宮と猫の島の様相とその両者の関係について、後日譚では猫の島と島民の表象の分析を中心に当該説話を読み解いてみたい。

なお、蛇と蜈蚣が争うモチーフの考察は、説話の形成過程の一端を明らかにする意義をもつと考えられる。しかし、後述するが、当該説話における起源譚と後日譚の生成過程は異なると考えられ、またこのモチーフは起源譚に限定されるもので後日譚にまで波及する要素ではないと考える。本稿では、起源譚と後日譚を併せ持つことで成立する説話世界や説話全体を通して認められる島のあり方や多様な関係性の解明を目的とするため今回は扱わないこととする。

猫の島について、『加賀志徴』は、「熊田宮の古事」の中に『今昔』巻三十一の第二十一「能登國鬼寝屋島語」に能登の沖に鬼の寝屋島があり、さらにその沖に猫の島があると記されていることを挙げ⁴、「猫の島といふは今の能登國なる舩倉島なるべし。」としている。

² 話末評とは、説話の内容が語られた後に「此レ」「然レバ」「此ヲ思フニ」などの言葉を持って物語の話題から引き出された教訓や批評、主題の確認などをもつ部分のこと。

³ 『新日本古典文学大系』では蛇に助力する要素に注目し、『集成』では神に助けた者が始祖となる点を重視している。

⁴ 『今昔』巻三十一の第二十一「能登國鬼寝屋島語」の中で、「今昔、能登ノ国ノ息ニ寝屋ト云フ島有ナリ。（中略）亦、其ヨリ彼ノ方ニ、猫ノ島ト云フ島有ナリ。鬼ノ寝屋ヨリ其ノ猫の島ヘハ、亦負風一日一夜走テゾ渡ルナリ。」と記されている。

その他、『集成』の注釈でも詳述されており、やはり巻三十一の第二十一の鬼の寝屋島を取り上げ、鬼の寝屋島を現在の輪島市に属する七つ島（大島、雁股島、龍島、荒御子島、甕島、赤島、御厨島）、猫の島を同じく輪島市の舳倉島に比定している。

なお、引用に用いた本文は全て『新日本古典文学大系 今昔物語集五』によるものである。

II. 起源譚の構成と背景

1 島の神の様相

起源譚では、島の神と熊田宮のそれぞれの様相と島のもつネットワークについて考える。はじめに、島の神の様相についてみていきたい。神は、釣人に対し能動的な働きかけを行っている。その具体的な姿を四つの場面で示したい。はじめの場面は、釣人が島に漂着する場面である。島へ上陸すると、釣人の前に男が現れる。

此釣人共、此ヲ見テ、「早フ人ノ住島ニコソ有ケレ」ト喜シク思フ程ニ、此男、近ク寄来テ云ク、「其達ヲバ我迎ヘ寄ツルトハ知タルカ」ト。釣人共、「然モ不知侍。釣シニ罷出タリツルニ、思ヒ不懸風ニ被放テ詣来ツル程ニ、此島ヲ見付テ、喜乍ラ着テ侍ル也」。男ノ云ク、「其放ツ風ヲバ我吹セツル也」ト云フ聞ニ、

と、男は島へ着くように風を吹かせたことを伝えると、釣人は「然ハ、此ハ例ノ人ニハ非ヌ者也ケリ」とこの男が只者ではないことを悟る。二つ目の場面は、神が釣人を島に招いた理由を語る場面で、

其後、主ノ男近寄来テ云ク、「其達ヲ迎ヘツル故ハ、此ヨリ澳ノ方ニ亦島有。其島ノ主ノ、我ヲ殺テ此島ヲ領ゼントテ、常ニ来テ戦フヲ、我相構テ戦返シテ、此年来ハ過ス程、明日来テ、我モ人モ死生ヲ可決日ナレバ、我ヲ助ケヨト思テ迎ツル也」ト。

と、神は蜈蚣との決戦のため釣人を島に招いたことが示される。

三つ目の場面では、蜈蚣に勝利した後

我、其ノ達ノ御徳ニ、此島ヲ平カニ領ゼム事、極テ喜シ。此島ニハ、田可作所多カリ。

島無量。生物ノ木員不知。然レバ、事ニ触テ便有島也。其達、此島ニ来テ住メト思フヲ、何ニカ。

と、神は釣人に島への定住を勧める。最後の場面は、釣人が妻子を迎えるため加賀に帰ることを望む場面である。以前の引用部分と重複するが、

然テ、男、釣人ドモ云ク、「我、其ノ達ノ御徳ニ、此島ヲ平カニ領ゼム事、極テ喜シ。此島ニハ、田可作所多カリ。島無量。生物ノ木員不知。然レバ、事ニ触テ便有島也。其達、此島ニ来テ住メト思フヲ、何ニカ」ト。釣人共、「糸喜キ事ニゾ可候ヲ、妻子ヲバ何ニカ可仕」ト云ケレバ、男、「其ヲ迎ヘテコソハ来ラメ」ト云ケレバ、釣人共、「其ヲバ何ニシテ可罷渡」ト云ケレバ、男、「彼方ニ渡ンニハ、此方ノ風ヲ吹セテ送ラン。彼方ヨリ此方ニ来ランニハ、加賀ノ国ニ御スル熊田ノ宮ト申ス社ハ、我ガ別レノ御スル也、此方ニ来ラント思ハン時ニハ、其宮ヲ祭り奉ラバ、輒ク此方ニ可来也」ナド、吉トク教ヘテ、道ノ程可食物ナド船ニ入サセテ、指出シケレバ、島ヨリ俄ニ風出来テ、時モ不替走り渡ニケリ。

と、神は加賀から再び島に戻る方法を伝える。この四つの場面では、定住するまでの神と釣人の関わりが描かれているが、その全てに神からの能動的な働きかけを読み取れる。また神は何度も風を吹かせて島と加賀の往来を助けていることから、航海の神の性格も読み取れる。このように猫の島の神は、説話内で人格化して登場し積極的に釣人と関わり島への定住を働きかける動的な存在として描かれている。

『今昔』の描く島の神は「年二十余ハ有ント見ユル男ノ糸清気ナル」男として登場するが、この神は古代から舳倉島に鎮座していた奥津比咩神社の神と考えられている。[谷川1989:262]。奥津比咩神社は『延喜式』に辺津比咩神社と対となって載るが、浅香年木氏は、奥津比咩神社と辺津比咩神社の間に古くは現在のセツ島と思われる仲津比咩神社を想定し、これら三つの神社を「へぐら三女神」と呼び宗像三女神のように対岸へ一直線に伸びる神の座とする対岸航路の守護神であったと述べている。[浅香1978:30-43] 先述したように『今昔』に描かれる島の神も航海の神としての性格がみとめられ、氏の唱える「へぐら三女神」の信仰と重なる姿とよむこともできる。

また氏は、この「へぐら三女神」の信仰は、気多社の異伝とされる『気多社嶋廻縁起』

の中に既に包括されていたと述べている⁵。紙幅の加減でこの縁起の冒頭のみを紹介する。

仁皇第八代孝元天皇御宇當国鳳至郡ニ一人之老翁、遍蔵翁ト有リ。其時海上ヲ見ルニ大船有テ船中ヨリ問フ云ク、是ハ何クノ嶋ゾ。遍蔵翁答云ク、是ハ日本國秋津州北陸道越中ノ國也ト、答フ時船中ヨリ五六歳計ナル王子ト覺敷三百餘人之從類ヲ相具テ彼翁ノアヤシノ蓬屋ニ入給テ翁ヲ親ト仕給テ三年経テ

「気多社御縁起」(『気多神社文献集』)⁶

と記されていて、氏はこの縁起を「異国の王子である気多の神が、まず「遍蔵ノ翁」(へぐらの翁)に迎えられて能登半島の北岸に上陸し、やがて能登一国を巡行した後に、寺家遺跡の位置する羽咋の海浜に留まった、それが気多神社であると説かれており(中略)有力神の気多大社と、対岸の交流に深い関わりを持った遍蔵の神々との深い結び付きが語られている」とする。ここにみえる鳳至郡の遍蔵の翁は、その呼称から舢倉島と対岸の鳳至郡が深い関わりをもっていたことを示唆すると思われ、浅香氏が提唱する奥津比咩一仲津比咩一辺津比咩の三神が示している大陸へ向かうラインとも一致する。また谷川氏も「八世紀代は、能登を通じて対岸の渤海との交渉が頻繁になる時期でもあり、当時の輪島と舢倉島は日本海航路の要衝地であったと考えられている」と述べている。[谷川1989:256]

当該説話には、島が北陸の外にも異なる関わりを持っていたとよめる記述がある。それは、神が釣人を招いた理由の中に示されている。

其達ヲ迎ヘツル故ハ、此ヨリ澳ノ方ニ亦島有。其島ノ主ノ、我ヲ殺テ此島ヲ領ゼントテ、常ニ来テ戦フヲ、我相構テ戦返シテ、此年来ハ過ス程、明日来テ、我モ人モ死生ヲ可決日ナレバ、我ヲ助ケヨト思テ迎ツル也

⁵ 浅香氏は、本来気多社は渡来系の神格であったが畿外の大社として成長していく過程で渡来系のカラーは消されていったとするが、その信仰は在地に残りつづけたとする。『気多社嶋廻縁起』は近世のものであるが、そのような気多社のもつ背景をこの縁起の中に求められると考えている。(浅香年木 1985 「信仰からみた日本海文化」『古代日本海文化の源流と発達』 大和書房)

⁶ 浅香氏は、『気多神社文献集』に収録の「気多社島廻縁起」とするが、筆者の調べでは当該書籍に該当する史料は存在せず、櫻井家文書巻二の「気多社御縁起」に該当箇所を確認できたので以上のように記述しておく。『気多神社文献集』 国立国会図書館デジタルコレクション

(<https://www.dl.ndl.go.jp/ja/FAQ.html#i3> 最終閲覧日2022年1月30日) また、引用の際、原漢文を参照しつつ、書き下した。また、適宜表記を改めた。

神は、島のさらに沖からやってくる敵を迎え撃つために釣人に助力を願っている。「此ヨリ澳ノ方」にある島はどの島か定かでないが、少なくとも加賀からやってきた釣人に向かって「此ヨリ澳」をみる視界には大陸までをおさめるような広い日本海がひろがっている。島を狙う敵の存在からも、北陸以外の関わりをもつ島の一面を窺うことができる。

ところで神は、先述したへぐら三女神や遍蔵の翁、当該説話の若き男など様々にその神格をあらわしているが、本来女神であった神が当該説話では若い男となった事情をその呼称に求めることができると思う。奥津比咩と対になっている辺津比咩は現在輪島市にある重蔵神社と比定する見方が強い⁷。この重蔵神社の祭事に「お斎祭」と称する祭りがある。以下、谷川健一『日本の神々 神社と聖地 8 北陸』から引用すると、

重蔵宮の神輿が二十三日の夜に河井の浜の御仮屋まで神幸すると、御仮屋の東西に立てられた巨大な柱松明に点火される。このとき、かつては舳倉島の奥津比咩神社の神輿が海岸に出て、輪島のほうに向いて着座したが、これは両者が夫婦神であるからだという。

奥津比咩神社と辺津比咩神社の神は共にヒメ神であるが、現在行われている上記の祭事では両社は夫婦神（奥津比咩が女神⁸）とされている。辺津比咩は本来その名の通りヒメ神であったと思われるが、いつからか女神の性格が失われている。門脇氏は、その著書の中で池辺氏の論を引用し「ヒコ・ヒメが対になった神名は、夫婦関係ではなく、兄と妹、姉と弟であり、時には父と娘、母と男児の場合も含めて、宗教の古代的特性をしめすもの」として、能登郡の式内社を例に挙げ「対となった社名はないが全てがヒコ神ヒメ神でありそれだけに古式を伝えている」とする。[門脇 1991 : 73] また浅香氏も「「比古」「比咩」を付した社号には、渡来系の信仰であることをストレートに表現している」とする。

[浅香 1985 : 87]。つまり辺津比咩が比咩の古い呼称を残しつつも次第にその女神の性格を失い、社号から神の性格を追えなくなっていく時期があったと思われ、当該説話の

⁷ 重蔵神社を鳳至比古神社に比定する説が古くからあったが、重蔵神社と舳倉島との関係を祭祀との関連から詳細に述べている『能登史徴』の伝承を重く見て、最近では重蔵神社を辺津比咩神社に比定する説が有力である。（谷川健一 1989 『日本の神々 神社と聖地 8 北陸』 白水社 256）に詳しい。

⁸ 重蔵神社のHP上で紹介されている行事・神事の八月二十三日の大祭で「重蔵神社の神様と舳倉島の女神様が河井の浜でお会いになり」と明記されている。（<https://juzo.or.jp> 最終閲覧日 2022年1月28日）

神も奥津比咩でありながら男として登場する事情もそれと大きく変わらないだろう。比咩の呼称を残しつつも比咩の性格をもはや留めていない頃に島の起源譚が生成されたことを窺わせるものであろう。

2 熊田宮の様相

島の神に定住を勧められる釣人は、一度加賀へ帰り妻子を連れて再び島に戻ることを望む。元の土地へ一度帰る点が当該説話の特徴ともいえるが、熊田宮はここであられる。以前の引用と重複するが、

然テ、男、釣人ドモ云ク、「我、其ノ達ノ御徳ニ、此島ヲ平カニ領ゼム事、極テ喜シ。此島ニハ、田可作所多カリ。畠無量。生物ノ木員不知。然レバ、事ニ触テ便有島也。其達、此島ニ来テ住メト思フヲ、何ニカ」ト。釣人共、「糸喜キ事ニゾ可候ヲ、妻子ヲバ何ニカ可仕」ト云ケレバ、男、「其ヲ迎ヘテコソハ来ラメ」ト云ケレバ、釣人共、「其ヲバ何ニシテ可罷渡」ト云ケレバ、男、「彼方ニ渡ンニハ、此方ノ風ヲ吹セテ送ラン。彼方ヨリ此方ニ来ランニハ、加賀ノ国ニ御スル熊田ノ宮ト申ス社ハ、我ガ別レノ御スル也、此方ニ来ラント思ハン時ニハ、其宮ヲ祭り奉ラバ、輒ク此方ニ可来也」ナド、吉々ク教ヘテ、道ノ程可食物ナド船ニ入サセテ、指出シケレバ、島ヨリ俄ニ風出来テ、時モ不替走り渡ニケリ。

七人ノ者共、皆本ノ家ニ返、彼島へ行ント云者ヲ皆倡具シテ、密ニ出立テ、船七艘ヲ調ヘテ、可作物ノ種共悉ク拈テ、先熊田ノ宮ニ詣テ、事ノ由申テ、船ニ乗テ指出ケレバ、亦俄ニ風出来テ、七艘乍ラ島ニ渡リ着ニケリ。

ここには、神と熊田宮の関係が二点示されている。一つは、熊田宮を「我ガ別レ」と示す点、二つ目に、神自ら熊田宮を詣でれば島へ戻れると伝えている点である。このことから、熊田宮と神との関係は「我ガ別レノ御スル」という関係にあり、そのために熊田宮は島への入り口として機能していると考えられる。熊田宮を詣でる釣人は、既に島の神に選ばれ定住することを認められている者である。彼らがそのような正統性をもって熊田宮を詣でるとき、熊田宮と釣人の関係は島への入り口とそれを知る者の関係となる。つまり、島と熊田宮、加賀の釣人の三者が相互の関係を保って島の起源譚を構成している。熊田宮は、島の始祖となる釣人と妻子を島へ送り届ける重要な役割を果たしている。

そして、島へ向かおうとする時「彼島へ行ント云者ヲ皆倡具シテ、密ニ出立テ」と密かに

向かったことが記されている。熊田宮から島へ向かう秘密のルートは当人でなければ知り得ない事実である。この秘密の暴露が示されていること、さらに先述した通り、熊田宮の存在はこの起源譚の中で重要な役割を担っていることから、起源譚は熊田宮の人々に語られたものと考えられるだろう。

熊田宮は、『延喜式』神明帳に記載される能美郡「熊田神社」とされ、古くは板津郷熊田村に鎮座していたが、寛永年間に社の北にある手取川の氾濫によって集落とともに流出し、その後神体は転々としながらも明治四十一年に現在地の小松市吉原町に移った。『加賀史徴』に、「中古まで湊のきは手取の川端に熊田ありしが、手取川洪水に追々かけ行き、遂に廢せしとぞ。」とあり、この「湊のきは手取の川端」の一带は、現在の手取川河口部で古代の比楽湊に隣接する地域と思われる⁹。また、海に流れ出る川沿いという立地から日本海を生活の場にする人々から信仰を得ていた可能性も考えられる。当該説話でも、島の神に航海の神の一面が認められ、熊田宮はその「我が別レ」と示されている。そして島の始祖となった釣人も、当該説話の冒頭で「□郡に住ケル下衆七人、一党トシテ常ニ海ニ出テ、釣ヲ好テ業」とする人々であった。島の始祖となる釣人が熊田宮を信仰したその人々だったと結論づけるのは早計だが、少なくとも熊田宮は、中央へと運ばれる人・モノ・情報が流れる交流の盛んな場所に隣接した地域にあった。熊田宮は、このような地理的環境から中央や日本海沿岸を往来する人々により交流が生み出され関わり合う世界をその視界に収めていたと思われる。

3 猫の島がもつネットワーク

次に、熊田宮が遠い日本海に浮かぶ猫の島との関わりをなぜ語ろうとしたのか、その背景の一端を猫の島の宗教的側面から考えたい。

先述したように、猫の島は石川県輪島市にある舳倉島に比定されている。『万葉集』巻十八で友家持が、「沖つ島い行き渡りて潜くちふあわび珠もが包みて遣らむ」や長歌の「珠洲の海人の沖つ御神にい渡りて潜きとるといふあわび珠五百箇もがも」と読んでいる「沖つ島」「沖つ御神」は舳倉島のこととされ、ここには海女の生活の場としてのみ登場するが

⁹ 日本歴史地名大系では、「比楽湊・比楽駅」の項目に記載があり、比楽湊は手取川扇状地の扇端西部の海岸線にあった古代の湊とされる。比楽湊より北は能登の加島津（現七尾市）への海路で結ばれ、諸国から京都・畿内へ雑物を運び込む港としての役割を果たした。

“ひらかみなと・ひらかのえき【比楽湊・比楽駅】石川県：石川郡／美川町／平加村”，日本歴史地名大系，JapanKnowledge，<https://japanknowledge.com>，（最終閲覧日 2022-01 月 30 日）

島全体を神とみる見方が当時からあったことが窺える。また、浅香氏により島に鎮座する奥津比咩神社が大陸との関わりをもった航海の神として人々の信仰を得ていたことはすでに述べた通りである。

これに加えて、舢倉島の宗教的側面を示すものとして、舢倉島から出土したと伝わる海獣葡萄鏡の存在が挙げられる。この鏡は、現在の石川県羽咋市にある寺家祭祀遺跡¹⁰で見つかった鏡と同形同箔のものであり、島とこの遺跡との繋がりが認められる出土品として注目される。この遺跡は、隣接する気多社の祭祀具に関わる生産や宮厨の性格をもつと考えられており気多社との深い関わりが指摘されている。[小嶋1985:132-150] 気多社は、八世紀に入ると神格が上昇し北陸を代表する大社となるが、その背景には当時の東北経営や頻繁に北陸にやってきた渤海使節との交流が関わっていると考えられている。

[谷川1989:207] 気多社は、京から遠い能登にありながら中央国家との関わりを深く持つ存在だった。海獣葡萄鏡の出土は、舢倉島がこのような気多社に連なる北陸の宗教ネットワークの中におさまっていた可能性を示している。

以上、宗教的な側面から島をめぐる多様な関係性をみた。熊田宮が島の背後に中央と関わる気多社を透視していたと言い切ることはできないが、少なくとも熊田宮が捉えていた猫の島は、日本海に浮かぶ孤島ではなく古代から多様なネットワークを持つ島の姿ではなかったか。猫の島起源譚には、島のもつ多様な関わりと大陸や中央また北陸の内側で向合う様々な視線が交錯する様相が読み取れる。

III. 後日譚の構成と背景

1 後日譚のはじまりについて

次に、島の後日譚の構成や背景について考えたい。その前に、当該説話の後日譚がどこから始まるか、次の三点を通してみていく。次話の妹背島起源譚との比較、後日譚に入ってから話の語り視点の変化、起源譚と後日譚の熊田宮に関わる記述の齟齬の三点である。まずは、妹背島の起源譚との比較から行う。一部重複するが、島のその後を語る本文を紹介する。

¹⁰ 海岸砂丘上に立地する奈良・平安時代を中心とした大規模な祭祀遺跡。祭祀に関連した生産活動が行われていたことがうかがえる。航海安全を祈願するなど公的色彩の濃い祭祀場と考えられる。

”じけさいしいせき【寺家祭祀遺跡】石川県：羽咋市／一宮寺家村”，日本歴史地名大系，JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>，（最終閲覧日 2022-01 月 30 日）

其後、其七人ノ者共、ソノ島ニ居テ、田島ヲ作り居弘ゴリテ、員不知人多ク成テ、今有也。其島ノ名ヲバ、猫ノ島トゾ云ナル。其島ノ人、年ニ一度加賀ノ国ニ渡テ、熊田ノ宮ノ祭ナル〔ヲ〕、其国ノ人、其由ヲ知テ伺ナルニ、更ニ見付ル事無也。思モ不懸夜半ナドニ渡リ来テ、祭テ返リ去ヌレバ、其跡ニゾ、例ノ祭シテケリト見ユナル。其祭、毎年ノ事トシテ于今不絶也。其島ハ、能登国、□郡ニ大宮ト云所ニテゾ吉ク見ナル。晴タル日見遣レバ、離タル所ニテ、西高ニテ青ミ渡テゾ見ユナル。

去ヌル□ノ比、能登ノ国、□ノ常光ト云梶取有ケリ。風ニ被放テ彼島ニ行タリケレバ、島ノ者共出来テ、近クハ不寄セシテ、シバラク岸ニ船繫セテ、食物ナド遣セテゾ、七八日許有ケル程ニ、島ノ方ヨリ風出来タリケレバ、走り帰テ、能登ノ国ニ返ニケル。其後、梶取ノ語リケルハ、「髯ニ見シカバ、其島ニハ人ノ家多ク造リ重テ、京ノ様ニ小路有ゾ見エシ。人ノ行違フ事数有キ」トゾ語リケリ。島ノ有様ヲ不見トテ、近クハ不寄ケルニヤ。

近来モ遙ニ来ル唐人ハ、先其島ニ寄テゾ、食物ヲ儲ケ、鮑・魚ナド取テ、ヤガテ其島ヨリ敦賀ニハ出ナル。唐人ニモ「此ル島有トテ人ニ語ナ」トゾ口固ムナル。

此ヲ思フニ、前生ノ機縁有テコソハ、其七人ノ者共、其島ニ行住、其孫于今其島有ラン。極テ楽シキ島ニテゾ有ナルトナン語リ伝ヘタルトヤ。

(下線部は筆者によるもの)

次いで、次話の「土佐国妹兄、行住不知島語第十」では、妹兄が島に定住した後、

然テ、年来ヲ経程ニ、男子・女子数産次ケテ、其レヲ亦夫婦ト成シツ。大ナル島也ケレバ、田多ク作り弘ゲテ、其妹兄ガ産次ケタリケル孫ノ、島ニ余ル許成テゾ、于今有ナル。土佐ノ国ノ南ノ沖ニ、妹兄ノ島トテ有トゾ、人語リシ。

此ヲ思フニ、前生ノ宿世ニ依コソハ、其島ニモ行住、妹兄モ夫婦トモ成ケメトナン語リ伝ヘタルトヤ。

(下線部は、筆者によるもの)

妹兄島起源譚の本文下線部が、当該説話の下線部と酷似していることがわかる。島の起源譚として前後に配置する際に行われた『今昔』編者の対応とよむことができ、島の起源譚をここで区切る見方ができる。

次に語りの視点の変化について、猫の島を語る起源譚は熊田宮の人々によって語られたものと思われるが、祭のエピソードは行われたことを後から知る人々の視点で語られており、話の発生の場が質的に異なると考えられる。

最後に三点目の起源譚と後日譚の齟齬について、「其ノ島ノ人、年ニ一度加賀ノ国ニ渡テ」とあるが、神は熊田宮について「此方ニ来タラント思ハン時ニハ、其宮ヲ祭り奉ラバ、輒ク此方ニ可来也」と語っていただけで、年に一度の祭には触れていない。年に一度熊田宮を祭る理由が起源譚の中で語られておらず、物語の連なりが認められない。「今ハ昔」で始まる物語の時間軸が一旦この記述の段で途切れていると読むのが妥当と思われる。以上三点から、島の後日譚は「其島ノ人、年ニ一度加賀ノ国ニ渡テ」からはじまると考えられる。

2 異なる視点と視野の広がり

後日譚は、はじめに熊田宮の祭について、二つ目に能登の舵取りの経験譚、最後に島に立ち寄る唐人の話で構成されている。一つ目についてはすでに述べた通り、熊田宮の外部による視点があらわれていた。次に、二つ目と三つ目のエピソードについて考えたい。

二つ目のエピソードは、島に漂着した能登国の舵取りの視点で語られる。舵取りは島に上陸しなかったが島や島民の様子を周囲に語っている。

三つ目は、唐人が島に立ち寄っているという話で、大陸との関わりが深い島の一面が貿易という形であらわれ大陸と日本を繋いでいる。後日譚では、島や島民を外部の視点で捉えており、起源譚を語る語りの視点は既に失われている。島民を語る視点は、祭の跡を見つめる人々から島へ漂着した能登国の舵取り、島へ立ち寄る唐人と熊田宮から次第に遠い存在となっていく。敦賀へ向かう唐人の話を語ることで、島は大陸までを視野におさめる広い日本海の中に位置付けられることになる。語りの視点の変化と次第に広がる視野は、猫の島をめぐる多様な関わりを描き出しつつ、島の位置する日本海が北陸と大陸を繋げていることを強く印象付ける。

3 島と島民の表象

後日譚では共通して島民の閉鎖性が描かれている。その姿は起源譚の中で既にみられるもので、「彼島へ行ント云者ヲ皆倡具シテ、密ニ出立テ」と島の始祖となった人々にも通じるものである。なぜ島民はこのような描かれるのか、次に島民がこのような表象される背景について考えたい。考える手がかりとして、猫の島が能登国にあることから、島民が往来した加賀と能登国の人々が『今昔』でどのように描かれていたかを見ていきたい。なお、

島民の表象と加賀や能登の人々の表象に通じるものがあるか否かの検討が目的なので、ここでは非仏法部の話を中心に取り上げる¹¹。管見によると、非仏法部で能登国が舞台の話は三話、加賀国の話は当該説話のみである。先に述べると、能登国の三話すべてに共通して、在地の資源や富を手にいれようとする国司が登場しその国司の前から姿を消す人々が描かれている。以下、国司と在地の人々との関わりを中心に、この三話を順にみていく。卷二十六の第十二は、能登国の鳳至孫が日本海の波によって打ち上げられた帯を偶然手にして豊かになる。その鳳至孫の次の代へと話は続き、帯を受け継いだ子も「同様ナル徳人」として暮らしているところに国司がやってくる。

其国ノ守ニテ善滋ノ為政ト云ケル人、此帶有ト聞テ、「其見セヨ」ト云テ、事ノ事ヲ付テ責タメントシテ、数ノ郎党・眷属ヲ引将テ、鳳至ノ孫ガ家ニ行居テ、日ニ三度ノ食物ヲ令備ケル。上下合テ五六百人許有ケルニ、「食物ヲバ吉ク嫌テ食へ」ト教ヘタリケレバ、露モ愚ナルヲバ返シ棄テ責ケレバ、吉ク堪タリケル者ニテ、云ニ随テ調ヘ備ヘケリ。然ドモ、暫クゾ居タラント思ヒケル程ニ、強ニ四五月モ居タリケレバ、鳳至ノ孫侘テ、此帯ヲ頸ニカケテ、家ヲ出テ逃ニケリ。国ヲ去ニケレバ、守ハ、家ノ内ノ物ヲ皆計ヘ取テ、館ニ返ニケリ。

帯を目当てに力づくで奪いにかかる国司に耐えかねて、男は国を離れていく。男のもつ富を奪おうとする国司とそれから逃げる男が描かれる。次いで、卷三十一の第二十一は、在地の資源を強欲に搾取する国司の話である。鬼の寝屋島は「河原ノ石ノ有ル様ニ、鮑ノ多ク有」る島だったが、

然テ、光ノ浦ノ海人ハ、彼ノ鬼ノ寝屋ニ渡テ返ヌレバ、一人シテ鮑万ヲゾ国ノ司ニ弁ケル。其レニ、一度ニ四五十渡ケレバ、其ノ鮑ノ多サヲ思ヒ可遣シ。

而ル間、藤原ノ通宗ノ朝臣ト云フ能登ノ守ノ任畢ノ年、其ノ光ノ浦ノ海人共ノ、鬼ノ寝屋ノニ渡テ返テ、国ノ司ニ鮑弁ケルヲ、強ニ責ケレバ、海人共侘テ、越後ノ国ニ返テ渡ニケレバ、其ノ光ノ浦ニ一人ノ人無クテ、鬼ノ寝屋ニ渡テ鮑取ル事絶ニケリ。

¹¹ 管見では、能登と加賀が舞台の仏法部の話はあわせて五話ある。卷十三の第三と第十四で、法華経読誦による往生譚である。卷十五の第二十四、第二十九、第五十二の三話もすべて往生の巻に位置し、これらは往生する人間に焦点があてられているため加賀や能登国の人々に限る話ではないと判断した。

能登の豊かな資源を搾取しようとする国司、耐えかねて国を去る海人が描かれる。以上二話には「鳳至ノ孫侘テ」（巻二十六の第十二）「海人共侘テ」（巻三十一の第二十一）と、富を狙い奪う国司とそれに耐えかねて国から逃げる人々が描かれる。両者には搾取する者とされる者の一方向的な関係が読み取れる。

巻二十六の第十五は、能登国の国司が佐渡の金を手に入れる話である。能登国では「鉄ノ鉄ト云ナル物ヲ取テ、国ノ司ニ弁ズル」事を行う者がいた。佐渡で金とれることを耳にした国司は鉄を取る長に金を取ってくることを命じる。長は、国司が忘れた頃に現れ金（と思われる袋）を渡したのちに姿を消す。

其後、此長、何チトモ無テ俄ニ失ニケリ。守、人ヲ分テ東西ニ尋サセケレドモ、遂ニ行方ヲ不知ラ止ニケリ。何カニ思テ失タリト云事ヲ不知。彼金ノ有所尋ネ間ヤ為ル、ト思ケルニヤトゾ疑ヒケル。其金千両有ケリトゾ、語り伝ヘタル。

然レバ、佐渡ノ国ニ金ハ掘ルベシト、能登国ノ人云ケル也。其長ノ、後ニモ必ズ堀ケンカシ。遂ニ不聞エデ止ニケリトナン語り伝ヘタルトヤ。

（下線部は筆者によるもの）

国司は「彼金ノ有所尋ネ間ヤ為ル、ト思ケルニヤトゾ疑ヒケル。」と消えた男に疑いの目を向けている。男の逃亡を、これ以上の金は渡さないという自身に向けられた意思表示と読み取っている。長は、国司の要求通り金を渡したにも関わらず疑われている。先にみたような、富を搾取される一方向の関係が両者に敷かれていなければ、守の長に対する疑いは生まれないだろう。この話は先にみた二話とは異なり「侘」て国から人々が逃げる話ではないが、国司の長に対する姿勢には当時の国司と在地の人々の一方向な関係を読み取れる。

この話は『宇治拾遺物語』（以下、『宇治』と記す）の「佐渡国ニ有金事」と同源とされているが、『宇治』の末尾では、

そののち、そのかねとりの男は、いづちともなく、失せにけり。よろづに尋けれども、行方も知らず、やみにけり。いかに思て失たりという事を知らず。「金のあり所を問ひ尋やすと思けるにや」とぞ、うたがひける。その金は、千両ばかりありけるとぞ語り伝へたる。

かゝれば、佐渡国には金ありけるよしと、能登国の者ども、語りけるとぞ。

となっており、『今昔』の下線部が『宇治』にはない。この『今昔』の記述は、編者自身が付した一文と考えられ、国司と同様に疑いの目を向けている。『今昔』編者は、国司の前から姿を消した後、長は必ず金を掘っていると思っている。

能登国を舞台にした話には、豊かな資源や在地の富を奪おうとする国司と彼らから逃れるように姿を消す人々が描かれていた。このような富をめぐる攻防を踏まえて当該説話に戻ると、島民の閉鎖的な姿は、在地の富を狙う国司を警戒した人々の姿に通じないだろうか。「極テ楽シキ」島の島民は豊かさを奪われないために閉鎖的な姿勢で外部の人間と関わっている、とすれば、『今昔』の「島ノ有様ヲ不見トテ、近クハ不寄ケルニヤ。」の一文は、消えた長への「後ニモ必ズ堀ケンカシ。」の視線に通じる。この視線は、豊かさと閉鎖性を表裏の関係に捉えなければ生まれないものであり、在地の富を狙う国司ら支配者層の人々の心性から創出されたものと読み解きたい。

IV. おわりに

本稿では、語りの視点とその変化に注目することで、起源譚と後日譚の生成過程が異なることを明らかにした。起源譚では熊田宮の人々による視点と読み取れ、後日譚では新たに島の外部の視点があらわれ島や島民が表象されていると分析した。その表象が形成される背景には、国司と在地の人々との一方向的な関係を下敷きに、国司らが在地の人々へ向けているまなざしから生まれたものと考えた。

舳倉島のシラスナ遺跡¹²は、九世紀頃まで人のいた痕跡はありながら十四世紀までは島に人が渡った跡がみられず、『今昔』の記述とよく符号するという¹³。[北国新聞社編集局 1986: 65] そうであれば、『今昔』編纂当時の十二世紀頃は、猫の島はすでに辺境の島だろう。赴くことがない島への好奇心によって語られた当該説話は、起源譚を基層にしつつ、熊田宮をはじめ島をめぐる北陸内外の関わりを語りながら多様な視点で重層的に形成されている。

¹² 5世紀中葉と八・九世紀ごろの重層遺跡。出土物に、製塩土器を含む土器類とともに貝殻・魚骨・獣骨などが出土している。谷川は、その貝塚的遺跡の出土物から舳倉島を「季節的な（夏季のみの）生活および祭祀の場とする集団の定期的な訪れを物語るもの」とみている。（谷川健一 1989 『日本の神々 神社と聖地 8 北陸』 白水社）

¹³ 卷三十一の二十一「能登国鬼寝屋島語」。藤原通宗による強鞭な取り立てによって鮑をとっていた海人が越後へ逃げてしまった話を指す。

参考文献

- 浅香年木 1978 『古代地域史の研究』 法政大学出版
1985 「信仰からみた日本海文化」『古代日本海文化の源流と発達』 大和書房
- 石川県図書館協会 1940 『気多神社文献集』 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://www.dl.ndl.go.jp/ja/FAQ.html#i3> 最終閲覧日2022年1月30日)
- 池辺弥 1970 「彦姫制史料集成」『成城大学短期大学部紀要』 第一号
- 阪倉篤義 本田義憲 川端善明 1979 『新潮日本古典集成 今昔物語集 本朝世俗部二』 新潮社
- 上田正昭 1998 『古代国家と東アジア』 角川学芸出版
- 上田雄 2002 『渤海使の研究 日本海を渡った使節たちの軌跡』 明石書店
- 門脇禎二 1991 『日本海域の古代史』 東京大学出版会
- 河内春人 2011 「古代国際交通における送使」『古代東アジアの道路と交通』 勉誠出版
- 北国新聞社編集局編 1986 『能登 舳倉の海びと』 北国出版社
- 清武雄二 2021 『アワビと古代国家『延喜式』にみる食材の生産と管理』 平凡社
- 小嶋芳孝 1985 「寺家遺跡とその性格」『古代日本海文化の源流と発達』 大和書房
2019 「渤海日本道と加賀・能登」『日本古代の輸送と道路』 八木書店古書出版部
- 小峯和明 1993 『今昔物語集の形成と構造 補訂版』 笠間書院
2008 『今昔物語集を読む』 吉川弘文館
- 宮田 尚 1980 「『今昔物語集』の受領たち」『文学における風俗』 笠間書院
- 谷川健一 1989 『日本の神々 神社と聖地8 北陸』 白水社
- 東北亜歴史財団 2015 『古代環東海交流史・2 渤海と日本』 明石書店
- 中野高行 2008 「新羅使に対する給酒と入境儀礼」『日本古代の外交制度史』 岩田書院
- 中村英重 1999 『古代祭祀論』 吉川弘文館
- 古畑 徹 2019 『渤海国とは何か』 吉川弘文館
- 三木紀人 浅見和彦 中村義雄 小内一明 2012 『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語 古本説話集』 岩波書店

- 森浩一 1984 『古代の日本海諸地域 その文化と交流』 小学館
森正人 1996 『新日本古典文学大系 今昔物語集五』 岩波書店
森田喜久雄 2021 『能登・加賀立国と地域社会』 同成社
森田平次 1936 『加賀志徴』 石川県図書館協会
1937 『能登志徴』 石川県図書館協会
村井章介／佐藤信／吉田信之 1997 『境界の日本史』 山川出版
村山修一 1999 「平安末期の加賀と能登」『加賀・能登 歴史の窓』 青史出版
矢野憲一 1989 『鮑 ものとなりの文化史』 法政大学出版

(神戸大学大学院人文学研究科)